

保育学生における実体験と対話・綴りを取り入れた 人と人との繋がりを再構築するゼミナール実践の試み —民俗舞踊「荒馬」の制作と踊りを通して—

Trial of a Seminar Exercises to Rebuild the Connection between People by Incorporating Real Experiences, Dialogues, and Spellings on Student at Nursery Teacher Training School: Through the Making and Dance of the "Arauma"

千葉直紀
CHIBA Naoki

キーワード：対話 綴り 人と人 荒馬

1. はじめに

保育者養成校においては、近年様々な課題が山積している。その課題はピアノなどの技術的な側面やそれに加えて日誌などの文章を読み解く力や書く力など、養成段階から身に付けていくことが必要な力もあれば、高校卒業段階までに十分に備わっているべき力もある。宮坂(2020)は、ピアノを指導法の観点¹から、松崎(2013)は、国語表現力の観点²からその必要性を示唆している。しかし、短期大学の入学段階においては保育者に必要な力もそうであるが、学生として学ぶ姿勢そのものに課題が見られることが少なくない。千葉(2020)は、保育学生における「困難さ」に向かう姿勢について示唆しており、教えられる姿勢が身につきすぎていて、自ら問い、学びに向かう姿勢が構築されていない現状³を指摘している。近年においては、そのような学びの姿勢に加え、分からないことを人に聞くことや他者が考えていることを察して動く力など保育者として必要な部分において2年間の養成期間の中で、変容やその機会もないままに卒業していく学生も少なくない。

中山ら(2020)は、保育者養成校の短大卒業生に対しアンケート調査を実施し「短大2年間の学びでは現場での保育を担うのは困難であり、3年制にするか4大化を目指した方が良い」と回答した割合が19.2%⁴であることを示しており、実に2割近くの卒業生が2年間という短い

期間において保育者を養成することに対して否定的な意見を持っていることも示されている。

現場の保育者を見てみると、特に専門学校や短期大学の出身者が多い。つまり4年制大学の出身ではない学生が保育者になる割合が多いのである。そのことは、文部科学省が示している「令和元年10月23日幼児教育の実践の質向上に関する検討会〈参考資料3〉」においても明らかであり、「幼稚園教諭の免許状保有状況については、68%が二種免許状であり、他学校種に比べて多い」⁵ことが示されている。つまり、専門学校や短期大学など、4年制大学以外の保育者養成校において免許・資格を取得する割合が非常に高いことから、専門学校や短期大学における保育者養成の内容が保育現場の保育実践に対して直接的に影響を及ぼす可能性が高いといえるのである。このことから2年間という短い期間の中で保育者養成における教授内容を具体的にどのように行っていくかという点については、益々その重要性を増してきている。保育者養成の期間において、学生の学びの姿勢や人と人との関わりにおける変容に影響を与えやすい科目が、ゼミナールの科目である。ゼミナールは他の科目と異なり半期または2期構成ではない。本学においては3期連続（1年後期から2年後期まで）で同じ学生と時間を共有することが出来る。1つの科目の中で最も長い時間を過ごす科目であるゼミナールの内容こそ非常に重要となると考えている。そのことからゼミナールにおける実践内容が学生の学びの姿勢や人と人との関わりに変容をもたらす契機となりうることを実践内容から明らかにしていきたい。

2. 目的と方法

本研究においては、学生の学びに向かう姿勢や人と人との関わりを基盤とした保育現場で重要であり、かつ学生に必要な資質を基に、3つの視点に焦点を当てゼミナール運営を行っていくこととする。その3つの視点とは、1つ目として、学生が自らの考えを他者に伝えようとする「対話」という視点、2つ目はその時に表現できたことやしきれなかったことも含めて考えていることや感じたことを他者に表現する「綴る」という視点、3つ目は、荒馬作成と踊りを通しての「実体験と身体を通しての知」の獲得という視点である。秋田（2013）が、「学び合う組織をつくっていくときには、雰囲気とか感情とか、その短いものをお互いに支え合う探索的な語りを共有していくことが実は大事なのではないか」⁶と述べていることから、語る、または語り切れなかったことを綴り共有していくことは非常に重要であるといえる。

筆者のゼミナールにおいては、用意されたものを順序良く作るのではなく、「さあ、どうするか」と額を突き合わせながらプラン建てされていない物事にどうやって出会っていくかという過程を味わうことに重きを置いている。文部科学省から「主体的で対話的で深い学び」⁷が近年、保育・教育の中でも重要視されるようになってきている。しかし、それは講義内でのいち場面や、ある1つの発表に向けた取り組みにおける対話だけでは到達しえないものである。喉元過ぎれば熱さを忘れるような表面的な出来事だけで物事が完結していくよう対話では保育現場においては通用しない。ましてやこの先自らの人生を自らの手で切り拓いていく学生においては、体験的な出来事を用意して対話をしたところで今後に活かされるものは体得されにくい。これまでの学びの姿勢に変容の契機を加え、再構築し直すことが出来る程の実体験と対話が必

要なのである。

本学におけるゼミナールは1年次後期から2年次後期までの3期で行われている。その中で卒業研究として2年次後期に論文の提出も行われる。しかし、卒業研究のみの取り組みでは文章の体裁を整えることは求められるが、教員が求めるラインをクリア出来ていればそれで合格となってしまう。これだけでは学生が自ら探求しようとする姿勢に辿りつきにくい。そこで、筆者のゼミナールでは、上記の3つの視点をいながらも卒業後も続くであろう、自らが探求を続けていくという学びの姿勢や人と人との関わりを再構築することを目的としてゼミナール運営を行っていくこととした。学生に獲得して欲しい姿勢としては、教員が示したものに従って“教えられる”という教員から学生へ与えられる学びではない。教員が教材として指し示すものはあるとしてもその中でより良いものを構築していくのは学生という、あくまでも学生が主体となって行うゼミナールである。

筆者のゼミナールにおける過去の運営内容については農業、コマづくり、竹とんぼづくりなど、実体験を通した様々なことを提起しながらゼミナール運営を行ってきた。しかし、どれも学生の大きな変容の契機となったかといえば、活動の連続性が保ちにくい上、単発の活動になってしまうことが多く、結論としては難しいものがあった。しかし、今回のゼミナールにおいては、荒馬作りと踊りをテーマにし、1つの活動を、3期を通して行っていく、制作と踊りという内容で構成していくことで活動の連続性の中で自己と対峙する瞬間がそれぞれに訪れるように構成を行った。ちなみに荒馬とは、青森県今別町に伝わる民俗舞踊である。筆者が以前保育者をしていた頃に保育者同士の集まりでこの踊りと出会い、心を動かされ保育教材としても扱いながら年長児と共に踊った経験がある。その中でいつかはゼミナールで実践したいという思いと、荒馬でなければ伝えられない人の生きる文化や、身体を通してでなければ感じえない知を共有したいと計画した。また、現代のICT化が加速していく社会であるからこそ、自分の手で作り、試行錯誤を繰り返し、それでもうまくいかない。その中で人と人が出会いながら良いものを練り上げていくという、生きていく営みそのものを体現していくのである。

ゼミナール構成メンバーはゼミ長1名、副ゼミ長3名を含めた全14名である。荒馬の制作と踊りという3期では完成しきれないかもしれないという教材のもと、どのようにゼミ生が計画を立て、教員も含めながら活動をすすめていったのかというプロセスを示していきたい。

3. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり、上田女子短期大学研究倫理委員会において、「人を対象とする研究」の倫理審査の承認を得た上で、学生の綴りやゼミ長会報告等の記録物を取り扱っている。また、本研究に対する協力者に対しては、本研究内容に関する意義・目的等を説明した上で、同意が得られる場合は署名・捺印をいただいた。また、この記録物や写真に関しては、本研究以外の用途で使用されないことなど、個人情報保護についても確認を行っている。また、途中での辞退についてもいつでも受け付けることをお伝えしている。また、データ・資料の管理は、研究室で厳重に保管し、PCとノートパソコンの2台とし、パスワード管理された状態で、筆者の

みが取り扱うことが出来るように配慮を行った。

4. 結果

(1) 学生の様子

荒馬を制作し、踊るまでに至る工程は、大まかに分けると①竹を取りに行く②木を購入し、切る③竹を割く④頭の作成⑤布を縫う⑥踊る6つの工程からなる。その中でそれぞれの学生が持つ力や人脈を活かしながら1つ1つをすすめていく。

①竹を取りに行く

荒馬の枠を作るためには竹が必要である。この竹も教員が取りに行くでも買いに行くでもなく、ゼミ生のメンバー内で竹を取っても良い環境を持っている学生を探すのである。そうした中で、自分の祖父の家に竹林があることや竹を取って良い場所を知っている知人がいるなど、学生の持っている資源やネットワークを基にゼミ活動がすすめられていくのである。ここでは、学生が幼少期からボーイスカウトを行っていた時の恩師が竹林を紹介してくださり、当日も同行していただいた。このようにゼミ内での活動に終始するのではなく、外部と関わらなければすすめられない部分が出てくる点も活動を豊かにしていく要素ともなった。

活動を行う際は、ゼミ長を中心にゼミナール当日の計画書を作成し、ゼミ担任に提出した後ゼミ生全員にメール添付にて情報を共有している。当日の準備物や段取りなどもゼミ生同士が確認し合いながらすすめていく。竹を取りに行った後のゼミナールでは竹取り作業当日に参加できなかった学生に対して動画を編集してアウトプットする様子もあり、ゼミナールメンバーに対して、自らがどう行動したら良いか考えて行動する様子も見られた。



図1 「荒馬で使用する竹を取りに行きその場で捌く様子」

②木を購入し、切る

荒馬の枠は竹も用いるが竹だけではなく、細めの角材も利用する。その角材についても近くのホームセンターに全員で行き、購入した。この際も、ゼミ担任の所有する荒馬の寸法を基に何センチの角材がどのくらい必要なかを計算してゼミ長、副ゼミ長、会計なども協力しながら必要な材料を揃えた。ここでも枠がうまく完成しなかったり、一度組み立てたものが壊れてしまったりする様子もあった。中には釘が飛び出してしまい何度もやり直す学生もいた。そのようなうまくいかない体験をくぐる中で他者に協力してもらいながら1つ1つの工程をすすめていく様子が見られた。

③竹を割く

竹を割く場面においても、ゼミ内で木の加工作業が得意な学生を探し、その学生に竹を割く際の先生になってもらうことを約束した。教員と空いている時間に竹を実際に割く練習をする時間も設け、当日のゼミではゼミ生の前で竹の割き方を伝え、それを基にゼミ生が自分の荒馬の枠となる竹を割いた。

割いた竹は長方形の形に釘で打ち付けた後、図2のように熱湯に浸しながら曲げる。非常に多くの工程があるので学生間の進度に差が生じてくるがその点についても教員が進度を調整することはせず、ゼミ長会などで話し合いながらすすめた。



図2 「割いた竹を熱湯につけて曲げる様子」

④頭の作成

荒馬作りの最も重要で根気のいる作業が頭づくりである。約4センチの木の板を馬の頭の形にのこぎりで切っていく作業である。この作業は電動のこぎりなどを用いれば比較的スムーズに作業が進むのだが、誰一人として電動のこぎりを使うというアイデアを出すものが居なかった。また、手持ちののこぎりで丁寧に刃を入れていく作業がより1人ひとりの馬の頭にそれぞれ

れの特徴が出て面白いものとなった。この作業の中でも木の繊維の性質から完成しかけた頭がぱっくりと割れてしまうなどのアクシデントが起こりその出来事がまたゼミ生同士のやり取りを豊かにしていくものともなっている。

⑤布を縫う

布を縫う作業は学生の中にも得意な学生、不得意な学生がそれぞれいる。その中でその作業にこだわる学生も出てくる。ゼミで全学に呼び掛けて集めた布を使用する学生、または布の配色にこだわり、自ら購入する学生、またはパッチワークのように小さな布をつなげて全て手縫いで行う学生と様々である。ここでも、ゼミナール内だけで作業がすすんでいくのではなく、学内外の資源を用いながら行い、1つ1つの段階をゼミ内で共有しながらすすめていった。また、大学のフェイスブック等で荒馬の活動を行っていることを知った匿名の方が2度も布を送ってくださり外部との繋がりの中で物事が進んでいき、学生にとっては励みになった。さらに、1年生の活動に興味を持った当時の2年生2名が、卒業までの4か月の間に自ら荒馬を作り、荒馬制作を行っている1年生に布を購入しプレゼントする機会もあり(図3)、1年生と2年生の交流も広がっていった。



図3 「先輩ゼミ生から後輩ゼミ生へ布のプレゼント」

⑥踊る

本来は、踊りの中で学生に伝えたいことがある。しかし、思いの他、計画がずれ込み完成が2年後期までずれ込んでしまった。学生は、初めて出会う荒馬の踊りの中で、表現することによって課題を感じ、学生によっては荒馬が完成した後もしばらくの間踊りに向かうことが出来ずにいたり、中には馬が完成していないのに踊りだけは踊ることが出来るようになったりする

学生もおり、学生それぞれのテンポで荒馬に触れる姿が見られた。

2年生後期の後半になると、荒馬が完成し始め踊る人数も増え、踊りの中で教え合う様子や踊れずにいた学生が他者に踊りを伝えるまでに成長する様子が出てくるなど踊りの中で他者を感じていく機会が増えていった。

(2) ゼミナール運営の柱

①対話

ゼミナールでは、言葉で伝え合うことを大切にしており、ゼミ活動の最後の5～10分は毎回時間を設けながら1人ひとことを語っていく。また、記録の書き方や作業の進捗などに問題が生じれば1コマを話し合いの時間に使うなどしながら、ゼミ生が感じている問題を無視してそのまますすめるのではなく、ゼミ生1人ひとりがゼミナールの一員として考えを発言出来るような機会を設けていった。それ以外でも保育・教育実習目的の作成に関しては、1年次はゼミ担任と何往復もしながら共に目的を完成させていく。ここでもゼミ担任やゼミ内の仲間同士での対話を重視している。また、2年次における保育実習Ⅱの目的作成は、1つの実習目的につき、ゼミ生3名以上から目的のチェックを受けて「OK」をもらわなければいけないというルールも設け、ゼミナールメンバー内で関わり合いが広がっていくようにした。このように荒馬作成のみではなく、荒馬作成以外の時間においてもゼミ生同士の関わり合いが自然に生まれていくような環境づくりについては、筆者が意図的に行っていた。

また、ゼミ長1名、副ゼミ長3名による「ゼミ長会」も荒馬制作やゼミ活動の中身によって1～2か月に1回行っている。その中でも荒馬の完成までの計画を話し合うなどして対話を繰り返している。図4はゼミの長副4名による「ゼミ長会報告」である。このゼミ長会は、ゼミ発足当初はゼミ担任も一緒に参加するようにしていたが、学生の空いた時間や放課後に行われることから毎回参加できなかったが、このような報告書を作成することにより、ゼミ担任のみならず、ゼミ生全員がこの報告をメール添付にて共有することで情報共有を行っている。図4においては荒馬の完成時期を設定することでゼミ生全員がその時期に完成することが出来るようにという目的で話し合いが行われた。その為に、1台しかないミシンをどう使用するかという点についても学内の教員に呼び掛けていくなどの方法を検討している様子が伺える。また、資料1には「ゼミ長会」の中での検討議題が示されている。「ゼミ長会」を定期的に設けるように構成したのは筆者である。しかし、その「ゼミ長会」を「ゼミ会」にし、参加したいゼミ生が参加しやすいように門戸を広げることが検討されている。このように、ゼミ長副のみがゼミ運営に関わるということではなく、ゼミ生1人ひとりが対話を大切に、意見を出し合うことができる場を自分たちで検討し、会を発展させようとしてきた過程を見ることができる。

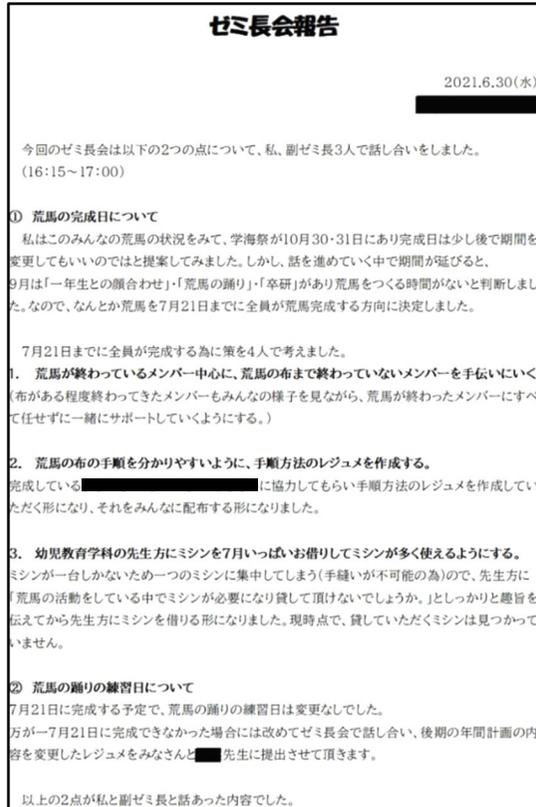


図4 「ゼミ長会報告」

〈資料1〉

※ (略) 以下、抜粋文章

〈ゼミ長会のあり方について〉

私(ゼミ長)が、ゼミ長会を「ゼミ会」にしたいと思ったからである。その理由は3つあることを伝えた。(中略)メンバーの中で「ゼミ長会を長副だけじゃなくて、やる気のある人も参加できるようにするのは?」と「誰でも参加できるような会にするのは?」という意見が出た。ゼミの役員になっていなくても意見や話を聞き言いたい人がいるかもしれないと思い、お互いの伝えあう環境を作りたい。

2役だけが集まるっていうのを無くしたい。長・副だからでるという縛りをなくし、役にとらわれず、意見をみんなと出し合いたいという思いがあるという3つの理由を伝えた。(中略)積極的に意見を出してくれる「〇〇ちゃんや〇〇ちゃんがいるからいいと思う」「月1回じゃなくて、話したいことがあるときに開くようにすればいいと思う。月1回にこだわらずに、話す内容がないのに集まって話すのには意味がないと思う」と2人の意見がでた。

(以下省略)

2021年11月26日(金)『ゼミ長会報告』より抜粋

②綴り

ゼミ長はゼミの活動内容のレジメを毎週作成し、副ゼミ長などと確認の上、ゼミ担任に持ってくるようになっていく。その上で副ゼミ長が活動記録を毎回綴るということを行ってきた。また、「ゼミ長会」があるときは「ゼミ長会」のレジメ作成と報告を記録している。1年生ゼミが終わる頃までにはこのような流れで綴っていた。しかし、2年生の5月下旬からは副ゼミ長が教育実習に行くということで、あるゼミ生がゼミ記録の記述を立候補したことから、ゼミの役職に関わらずゼミ生全員が輪番制でゼミ記録を書くこととなった。その後は、ゼミ記録の頻度なるべく偏らないように全員が書いている。資料2・資料3は、ある日のゼミ生のゼミ記録である。資料2では、自ら制作した荒馬の完成度に疑問を感じ、自分自身の生活とも重ねながらゼミ活動について綴っている。それに対して翌週のゼミ記録を書いているゼミ生Bが、その内面の揺れに共感しながら自らの体験を綴り、励ましている。このように表面的な対話ではなく、内面に触れるような対話をゼミ内で綴りを通して共有している。ちなみにこのゼミ記録についてもゼミ内のメール添付にて共有されており、その綴りについて空き時間に語るゼミ生同士の姿もあり、語りと綴りによって他者を双方向から捉える契機ともなっている。

このように、一年半という期間をかけて、ゼミ内の学生同士が自己の内面を綴り、メンバー内で共有することにより、仲間から受け入れられる安心感を得ていくのである。現代の社会においては、人と人との関わりが地域や家庭内においても希薄化している。その中においてもこのゼミ活動を通して、学生1人ひとりが新たに人と人との深い関わりを通して、自己とも出会い直すのである。

〈資料2〉

〈ゼミ生Aの記録〉

最近、みんなの馬を見る度に自分の馬が醜く見えてきている。みんなが凄すぎて自分はダメなんだって、私の馬はかわくないって思っています。でも体育館にいと気付いたら自然と笑顔になっていて、早くこの輪に入りたいって思うようになった。〇〇が踊るようになってみんなで追いかけてこしたり練習したりすごいで感動したり私も早くそれやりたい。馬さえ完成していれば、私をもっと頑張ればそれは味わえるんだらうなって。でも馬を見る度にここ直さなきゃここ直さなきゃってやること多く感じて嫌になってます。やるからには完ぺきにやりたい性格で、寸法合ってなかったら嫌だし、ちょっとまがってたら気になる。

(以下略)

〈資料3〉

〈ゼミ生Bの記録〉

(略) Aさんが荒馬壊したい！完璧に作りたい！って思っていることは気づかなかったな。人のものはよく見えちゃうんだよね。隣の芝は青いのね。Bだって自分の荒馬よりみんなの

荒馬のほうが良く見える。でも、自分の作った完璧じゃない荒馬をつけて踊っていると段々愛着が湧いてくる。壊したいって思っているAさんの決断はそりゃあ認めるさ。でも、完璧を追い求めすぎると、何もできなくなっちゃうよ。なんせBがそうだったからね。(中略：自分の経験談を綴る) —でもこの経験を通して、ほどほどでいいんだって嫌というほど思い知らされた。完璧は無理なんだって。未熟でもいいんだって。そう思ったらパーッと生きやすくなった。(中略) だから人間はほどほどでいいんだよ。まあそれが難しいから悩んじゃうんだけどね。でも完璧でなければならない理由なんてないし、完璧じゃない自分も自分なんだって思えるようになることのほうが大事だと思う。(以下略)

③実体験と身体を通しての知

荒馬を制作する工程は竹を取りに行くところから始まり、非常に手間が掛かる上に失敗も多く、なかなか簡単には進まない作業である。しかし、時間をかけて1つの物を完成させる間に1人ひとりのことを理解し合う契機ともなりうる。作業の中でも木を加工するのが得意な学生、布を縫うのが得意な学生と体験を通しながら1つ1つ工程をすすめていく様子が見られた。資料4からは、2人組の相手と踊り合い、お互いの距離感が近づくことで踊りの面白さを感じていることが伺える。これは、1人で踊っていては得られない感覚であり、他者と踊っているからこそそのものである。資料5からは仲間の中で1人、声を発したところ集団から「ラッセラッセラッセラ！」と声が返ってきて心地よさを感じている場面である。集団の中で1人で大きな声を出すことは非常に心細いことではあるが、その後に仲間から声が返ってくるのである。この自己と他者との関係を自らの身体(声)を通して味わうことはゼミナールの3期の営みを具現化している瞬間であり、その仲間とであるからこそより高揚感を感じられるのではないだろうか。資料6は太鼓の音と自身の踊りの捉えである。太鼓のリズムと自身が踊りのテンポがやや噛み合わないという状態に対して、太鼓のテンポではなく自身の踊りの踏みが1拍分多いことに気付いたのである。誰かに言われたという訳でもなくより良い踊りにしていこうとする中で自ら問い、解決の方策を探るのである。また、〈資料7〉については、全員の荒馬が完成し、発表する機会があった後の綴りである。自らの身体の動きと内面が変化していく様子を自覚し、自分自身もそのことに驚きを感じている描写が表現されている。

〈資料4〉

〈ゼミ生Cの記録〉

(略) 準備が終わったので、〇〇と踊ろうということになりました。2人とも振り付けが曖昧でしたが、1人が後ろへ下がって1人が前へ行くところで寄りが近くなると恥ずかしいけど楽しい気持ちになり (中略) 笑い合いながら踊っていました。

(以下略)

〈資料5〉

〈ゼミ生Dの記録〉

(略)「用意はいいか〜い〜！」と言うと、「いいよ〜！」と返ってきます。「ラッセラ〜ラッセラ〜」と声を出すと、「ラッセラッセラッセラ！」と返ってきます。(中略)自分が声を出してみんなが返してくれると嬉しいです。感動的です。

(以下略)

〈資料6〉

〈ゼミ生Eの記録〉

(略)〇〇は太鼓に苦戦しているんだけど、今日リズムがピタッと合いました。気持ちよかったです！まさか踊りが違っていたとは(1拍分つめちゃってただけなんですけど、その一拍を待つと太鼓と合うのです)〇〇は〇〇に「振付を教えてほしい」と頼み一緒に踊っていました。

(以下略)

〈資料7〉

〈ゼミ生Fの記録〉

(略)皆の前で踊りを発表する時、足が滑って動きが遅くなってしまった。その時に、自分が本気で踊ろうとしていることに気付き、今まで本気で向き合えていなかったのに「足が滑らなければもっと早く動けるのに」「もっと本気で踊りたい」と思うようになっていて、自分自身の気持ちの変化に驚いた。(以下略)



図5 荒馬を踊るゼミ生



図6 制作した荒馬

5. まとめ

ここで、筆者のゼミナールで大切にしてきた3つの視点である「対話」・「綴る」・「実体験と

身体を通しての知」という点についてまとめていく。大田（1990）は、日本における「群（むら）」社会の崩壊や経済成長が共同体に致命的な影響を与えているとしながら、「コールドターの言う『共謀』（conspiracy）して生きていく能力を持たなくては、生存できないのです。そして社会的動物としてのそれらの能力は、出生後、実に多くの経験の蓄積によってようやく身に付けることが出来るのです」⁸と述べている。大田がコールドターの言葉を使って述べた『共謀』（conspiracy）は、幼少時代に子ども同士が群れて集まり面白いことを企てるようなたくらみ（conspiracy）のことである。つまり、大田は、もともとは本能的に自然に獲得されてきた人と人とが関わり合いながら「何かしよう」と物事をすすめていく力が、今や自然な形で獲得されるものではないことを示唆している。このことから、本ゼミナールで経験した「対話」・「綴る」・「実体験と身体を通しての知」という視点が学生にとって重要な経験として位置づいていったのではないだろうか。加えて大田（1990）は、「ヒトが人となるための教育 - 種の持続としての教育という仕事は、蓄積されてきた重い文化を仲立ちに、選ぶ力と結ぶ力を1人ひとりの子どもが自分の中から引き出すのを助けるものなのでしょう。1人ひとりの子どもの中に『かくれているこれらの力をあらわにする』、それはまさに『ポエイシス』であり、芸術（アート）なのです」⁹と述べている。『ポエイシス』とはギリシャ語で「創造」という意味である。ゼミナールという小さな集団の中で「対話」や「綴り」という自己の内面をあらわにしていく経験やあらわにしてもそれを許容してくれる集団の存在が、踊りを通して「身体を通しての知」の深まりにつながっていったのではないだろうか。この年度のゼミナール生は、コロナ禍の真ただ中に入学し、その2年間をコロナ禍が明けることなく過ごした学生である。人と人とが共謀する、たくらむ（conspiracy）という1つの活動を面白く豊かに広げていこうとする営みが、コロナ禍という行動に制限がある中でも活動の幅を広げ、学内外の様々な人との関わりや交わりを実現させていくことができたのではないだろうか。これはまさに、創造しアートする姿といえる。

6. 考察

本ゼミナールにおいては、学生の学びに向かう姿勢や人と人との関わりを基盤とした保育者養成を試み、また、生きていく上で必要となる素地を耕す目的で、1年後期・2年前後期の3期を通して民俗舞踊「荒馬」を教材としてゼミナール活動を行った。ゼミナール運営の柱としては、1つ目として、学生が自らの考えを他者に伝えようとする「対話」という視点、2つ目はその時に表現できたことやしきれなかったことも含めて考えていることや感じたことを他者に表現する「綴る」という視点、3つ目は、荒馬作成と踊りを通しての「実体験と身体を通しての知」の獲得という視点を大切にしながらゼミナール運営を行ってきた。

対話を習慣化したことによって学生のアウトプットの質も向上し、人前で話すことが苦手な学生においても1年後期の時から比べれば格段に対話に中身が詰まったものになってきている。また毎週書く「ゼミ記録」においても大きな変容が見られた。ゼミナールを通して見てみると、対話や記録のみが飛躍的に向上することはほとんど見られない。しかし、活動へ取り組む姿勢

やゼミナールの仲間と共に物事に取り組む姿勢の変容と共に、記述する中身に飛躍的な変容が見られる。記述においては、羅列的な文章だったものからエピソード記述が見られるようになり、また内容においても自己の内面に迫るものや他者を意識した内容へと変容が見られた学生も多くいる。

そして何より本ゼミナールの中で最も変容が見られた点が、人と共に物事に取り組む姿勢である。今回のゼミナールは14人と人数が多かったこともあり、それぞれが遠慮し合いながら、または問題が起こっていても取り上げることもなく発足当初は進んでいた。しかし、ゼミ長をはじめとしたメンバー全員が回を重ねるごとに問題と感じたことは議題にあげるなどしながら、発言したり考えていることを語ったりするようになっていった。このことは佐伯（1995）が、鳥山敏子の実践から、強調して説明している次の言葉からも捉えられる。「からだの芯のところからことばにして出すこと、出されたことばをからだの芯のところでは受け止めることとの往復運動を徹底的に行うことを通して、『自分の深いところにある本当の思い』をまっすぐに表現する『自分のことば』を探すということである。そういう本当の『自分のことば』が出せるようになったときというのは、実は、『他人のことば』を、まさにからだの芯で受けとめられるときでもある」¹⁰。このような鳥山の実践のように普段のコミュニケーションでは到達しえないコミュニケーションに、本ゼミナールでの対話や綴りでは到達しているといえる。佐伯（1995）は、加えて鳥山敏子の実践※1から「そのことが『人』への理解にとどまらず、私たちの生きているこの世界全体への『ほんとうの理解』にまで広がることをやはり鳥山氏自身が確信し、自ら実践し、それを子どもたちに伝えようとしているのである」¹¹とも述べている。筆者のゼミナールにおいても学生が、表面的な言葉を捉えるのではなくその対峙する人物のこれまでを丸ごと含めながら理解し合い、人と人との理解から世界全体を理解する姿にもつながっていったといえるのである。

このことは、12月に自分たちが制作した荒馬を用いて「荒馬体験会」を学生が企画したことにも繋がっている。ゼミナールで得た活動を自分たちの中だけで終わらせるのではなく、他者とも共感したいという思いから学科を問わず、学年を問わず学生を誘い、また学生だけにとどまらず学内の教職員や事務員をも誘いながら共に荒馬を楽しむ様子まで発展した。図7は学生が荒馬体験会を企画した際に学内に張り出し、教職員に配布したチラシである。自分たちが行っていることを他者とも共有しようとする姿勢そのものが自ら問いを立て、学びに向かう姿勢そのものといえる。

本ゼミナールにおいては、多くの学生が自己と対峙し、変容の契機に出会う出来事が見られた。しかし、コマ数の問題や作業工程の多さから荒馬作成の時間を2コマ続きにするなどの活動時間の設定の工夫が必要であることも課題としてあげられる。さらに、今回は1年後期、2年前後期を通じて外部とつながっていく場面がいくつかはあったが、外部との繋がりを前提に置きながら活動の動機としていく方法も可能性としては考えられる。それぞれの学生が取り組みを通して自ら企てる創造の場がより膨らむようなゼミナールの展開を模索していきたい。

荒馬体験会について

みなさん、こんにちは！ 私は [redacted] と申します。
私たち [redacted] ゼミは昨年の10月からゼミの活動で『荒馬』の活動をして
います。そこで、ゼミで荒馬を活動している中で、みなさんにぜひ荒馬
を体験して頂きたいと思い、「一日限定の荒馬体験会」を開くことを決
めました！

- ◇ 日時：12月16日
- ◇ 時間：4・5限
- ◇ 参加者：全生徒・先生方
- ◇ 場所：体育館



「一日限定です！！」

「荒馬ってなに？」「学科が違うけど心配」「やってみたい！」「荒馬みてみたい」「踊
ってみたい」という想いをもっている方はぜひ参加してみてください！
先生方も「ちょっと気になる」「ぜひやってみたい」という想いがあればぜひ参加
して頂きたいです！
[redacted] の荒馬メンバーは当日お待ちしております(o´´´o)ｺ

図7 荒馬体験会の催し

※1. 鳥山敏子の実践（1985）「からだ・ことば・イメージの授業イメージをさぐる」株式会社
太郎次郎社など

〈参考引用文献〉

1. 宮坂まみ・小川美智子（2020）「保育学生のピアノの上達と指導法の関連についての考察」
－保育士養成課程における調査研究－環太平洋大学研究紀要（16），pp. 107-115
2. 松崎史周（2013）「保育者養成短期大学における国語力育成のあり方」清泉女学院短期大学
研究紀要（31），pp. 1-11
3. 千葉直紀（2020）「保育学生における『困難さ』との向き合いに関する一考察」：「問い」と
「学び」という「主体」を置き去りにする保育・教育への提言 上田女子短期大学児童文化
研究所所報（42），pp. 35-46
4. 中山正雄・瀧口 優・花原幹夫・小松 歩・源証 香・長井覚子・佐藤 文・宮崎佑介（2020）
「短期大学における保育者養成の在り方についての研究」－短大保育科卒業生のアンケート
調査から短大の保育者養成の在り方を探る－白梅学園大学・白梅学園短期大学子ども学研
究所研究年報（56），pp. 64-64
5. 文部科学省（2020）「令和元年10月23日幼児教育の実践の質向上に関する検討会〈参考資料

3)」（「平成28年度学校教員統計調査」より作成）

https://www.mext.go.jp/content/1421925_08.pdf

6. 秋田喜代美（2013）「学び続ける教師をいかに育み支援するか」（日本教師学学会第14回大会（2013年3月9日）講演記録）教師学研究13(0), pp. 1-12,
7. 文部科学省「新しい学習指導要領の考え方」 2022年8月
<https://www.bing.com/search?q=%e4%b8%bb%e4%bd%93%e7%9a%84%e5%af%be%e8%a9%b1%e7%9a%84%e3%81%a7%e6%b7%b1%e3%81%84%e5%ad%a6%e3%81%b3+%e6%96%87%e9%83%a8%e7%a7%91%e5%ad%a6%e7%9c%81&qs=SC&pq=%e3%81%97%e3%82%85%e3%81%9f%e3%81%84%e3%81%a6%e3%81%8d&sk=SC1&sc=6-6&cvid=8BFE20C1C78E42D0A4C545CE0CA1E837&FORM=QBRE&sp=2>
8. 大田 堯（1990）『教育とは何か』株式会社岩波書店 p. 68
9. 同, p. 129
10. 佐伯 胖（1995）『「学ぶ」ということの意味』株式会社岩波書店 p. 125
11. 同, p. 127